

## 特集 2

## グローバル世界をつなぐ長崎・中国

## —記憶の共同体を目指して—

特集2は、2016年10月21日に長崎大学で開催された講演会「グローバル世界をつなぐ長崎・中国—記憶の共同体を目指して—」（主催・長崎大学多文化社会研究会、共催・ワンアジア財団寄付講座「共生するアジアの多文化社会」）の記録である。

2016年秋以降の、英国のEU離脱、反グローバル化で過激ともとれる政策公約を掲げるトランプ大統領の就任に象徴されるように、第二次大戦後の国際関係は転換期を迎えて、まさに「揺らぎの世界」に深く嵌りつつある。

1990年代以降、世界冷戦終結後の時代環境が激変するなかで、ポスト冷戦時代の国際関係が新時代に相応しい体系を創り出されるのか、あるいは旧来の国民国家主体のウエストファリア体系を継承した、改良版の国際システムが機能していくのか。喧々諤々の議論が繰り返されてきた。この間、グローバリズムやグローバリゼーションという術語が社会的な日常生活にも簡便で楽観的響きのする肯定的な意味と、消極的な意味が混在しながら buzzword として浸透した。これと平仄を合わせるかのように、グローバリズムの波は国境を超えて浸食し、「国民国家の衰退」を促すのではという直線的なシナリオが喧伝されてきた。しかし、実態はより複雑であり、ヒト・モノ・カネそして情報の越境移動は、国家と国家、国家と市民、市民と市民の関係を動揺させながら複合的な相互依存のネットワークを形成し、グローバリズムと反グローバリズムの緊張と対立を一段と増殖させてきた。

冷戦後4半世紀が過ぎた現在、国家という政治組織とグローバルな世界はどのような規範を共有し、どのように変わろうとしているのか。こうした問題認識の下、講演会では「グローバル世界をつなぐ長崎・中国」を主題に据えて、グローバリズムとポピュリズムの対立図式と、国家と権力を中心概念に据えた現実主義を、超越するための新しいグローバル世界について「つながる」をキーワードに、日本を代表する3人の国際政治・外交史研究者に論じていただいた。

入江昭・ハーバード大学名誉教授には、グローバル時代の「人間とは何か」という根源的な問いに遡及し、国家を超越した普遍的な「人間」と、共通する規範としての「人権」を基本に全人类的な相互依存の「つながり」の重要性を発題していただいた。これを受けて平野健一郎・東洋文庫常務理事、李廷江・中国清華

大学日本研究中心教授の両先生には、長崎と平戸というローカルの視点を交えて、「国際文化関係史」として時間軸・空間軸の双方から、平和な世界の構築のための人間性の相互交流関係と、長崎から広がる世界大の「つながる世界」をテーマにご講演いただいた。

なお、講演会には長崎大学多文化社会学部生を中心に200名（一般聴講者を含む）が参加し、講演の末尾には「つながる世界」と「記憶の共同体」についての質疑応答の記録を収録した。

（森川裕二）